

HPVワクチンについて知ってください

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。
まずは、子宮けいがん^{けい}とHPVワクチン、子宮けいがん検診^{けんしん}について知ってください。
周りの人とお話ししてみたり、かかりつけ医などに相談することもできます。



HPVワクチンを受けることを希望する場合は 詳細版
P5,8

小学校6年～高校1年相当の女の子は、
2種類のHPVワクチンを公費で受けられます*。
病院や診療所^{しんりょうじょ}で相談し、どちらか一方を接種します。
ワクチンの種類によって接種の間隔が少し異なりますが、
どちらも半年～1年の間に3回接種を受けます。接種には、保護者の方の同意が必要です。
*公費の補助がない場合の接種費用は、3回接種で約4～5万円です。

対象年齢の
女の子は公費

半年～1年の間に
3回接種

〈お問い合わせ〉

酒々井町保健センター

〒285-0922 酒々井町中央台4-10-1

TEL 043(496)0090

FAX 043(496)8453

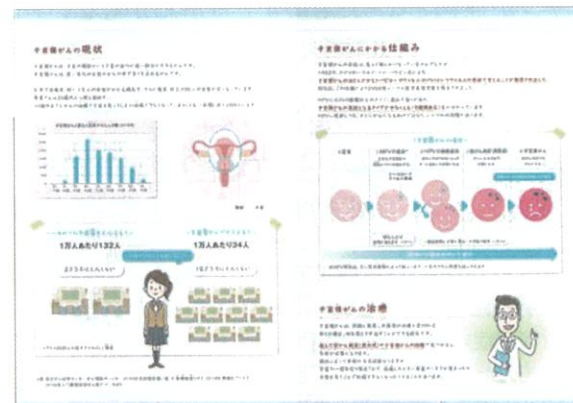
✉ kenkou@town.shisui.chiba.jp



HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は

このご案内の内容をもっと詳しく説明している「HPVワクチンについて知ってください^{しょうさいばん}」や、
その他のご案内をご覧ください。

厚労省 HPV



がい よう ばん
概要版

詳しく知りたい方向けの詳細版もあります。

小学校6年 ~ **高校1年^{相当}** の女の子と
保護者の方へ大切なお知らせ



HPVワクチンについて知ってください
～あなたと関係のある“がん”があります～

ウイルス感染でおこる子宮けいがん

詳細版 P2~3

「がんってたばこでなるんでしょ？」

「オトナがなるものだから私は関係ない」って思っていますか？

実はウイルスの感染がきっかけでおこる“がん”もあります。その1つに子宮けいがんがあります。

HPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が原因と考えられています。

このウイルスは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです*。

感染しても、ほとんどの人ではウイルスが自然に消えますが、一部の人でがんになってしまうことがあります。

現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、感染を防ぐことががんにならないための手段です。

*HPVは一度でも性的接触の経験があればだれでも感染する可能性があります。



女性の多くがHPV(ヒトパピローマウイルス)に
“一生に一度は感染する”といわれる

がんになる場合も

感染を防ぐことが
がんにならないための手段

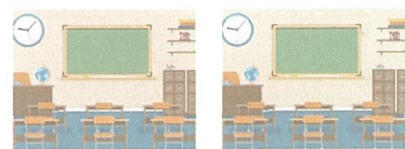
<何人くらいが子宮けいがんになるの?>

日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮けいがんになり、毎年、約2,900人の女性が亡くなっています。患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約1,000人います。

<一生のうち子宮けいがんになる人>

1万人あたり132人

2クラスに1人くらい

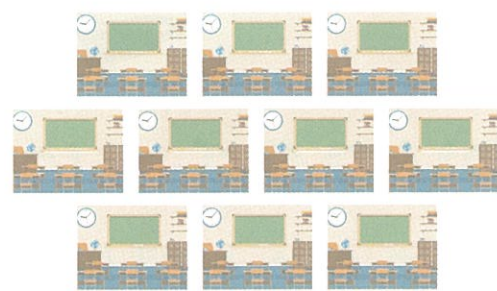


1クラス約35人の女子クラスとして換算

<子宮けいがんて亡くなる人>

1万人あたり34人

10クラスに1人くらい



出典 国立がん研究センター がん情報サービス 2018年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2019年累積死亡リスク、2019年人口動態統計がん死亡データより

子宮けいがんて苦しまないために、できることが2つあります

詳細版 P4

① 今からできること

日本では、小学校6年~高校1年相当の女の子を対象に、子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチンの接種を提供しています。

HPVの感染を防ぐことで、将来の子宮けいがんを予防できると期待されています。

カナダ、イギリス、オーストラリアなどでは女の子の約8割がワクチンを受けています。



② 20歳になったらできること

HPVワクチンを受けていても、子宮けいがん検診は必要です。

2年に1度検診を受けることが大切です。



HPVワクチンの効果

詳細版 P5

HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類のものがあります。

HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。

そのことにより、子宮けいがんの原因の50~70%を防ぎます*。

また、HPVワクチンで、がんになる手前の状態(前がん病変)が減るとともに、がんそのものを予防する効果があることも分かっています。

*ワクチンで防げる種類のHPVが、子宮けいがんの原因の50~70%を占めます。



HPVワクチンのリスク

詳細版 P6

多くの方に、接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。

筋肉注射という方法の注射で、インフルエンザの予防接種等と比べて、痛みが強いと感じる方もいます。

ワクチンの接種を受けた後に、まれですが、重い症状*1が起こることがあります。

また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動*2といった多様な症状が報告されています。

ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、接種後に重篤な症状*3として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり約6人です。

ワクチンを合計3回接種しますが、1回目、2回目に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。

接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください*4。

*1 重いアレルギー症状(呼吸困難やじんましんなど)や神経系の症状(手足の力が入りにくい、頭痛・嘔吐・意識の低下)

*2 動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと

*3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれています。

報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。

*4 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。

